

当時南山大学の英米学科の一年生は LL 教室で、外国から輸入したテープを用いて英会話を学んでいました。その頃、輸入テープが届かなかったので、大学の録音スタジオで、教材のテープを作ることになりました。英語を学びに来ていた私が選ばれて、アメリカの先生と、カナダの女性の先生と 3 人で吹き込みました。

私は既にある技量に届いていたことを示す事実ですが、もうそれで良いと思いがちだが、その力量を保ち、尚且つ磨き上げるには、良いコーチが要るとのアドバイスでした。良いコーチとは、自分を外から眺め、指摘し、矯正してくれる人達や、事象や、書物です。

さて、当時のニューヨークでの毎日の生活は、地下鉄に乗って通勤でしたが、その地下鉄までの駅を歩くのに雨が降ろうが、雪が降ろうが、決して傘をささない人をよく見ることでした。どんなに雨が降っても、決して街中を走らないニューヨーク市内で、走っているのは、日本人だけだと言われてしまいました。

地下鉄を降りると、長いエスカレーターで外に出るのですが、必ずどちらか一方に片寄って人が乗っていて、片側は人が乗っていて、片側は急いでかけ上がったたり下りたりする人が使っていました。出口で手をあける場合があれば、必ず後続の人が来るまで支えており、次の人がサンキューと言って、また次の人が来るまで開けているという状態でした。これが朝の通勤時です。会社にはある期間始業時より 30 分位ずつ前に出社しておりましたが、必ずボスは仕事をしていました。テープレコーダーに今日の予定をふきこんでいる様子が見えました。始業時を過ぎると、それを秘書が受け取って処理していました。ボスの部屋はガラス張りで、外から中がよく見通せました。

勤めの最初の日にはアメリカのある断面を表している体験でした。一通り紹介された後、周りの人と少し雑談をし、会社の規則書 **Guide manual** などを読み始めてお昼になりました。私は当然、彼らが私をどこか昼食のできるところへ案内してくれると思っていました。ところが、誰一人、私に見向きもせず、出て行ってしまいました。後で少しずつわかったことですが、彼らはそれぞれ自分の行きたい店で、食べたい物を別々に調達しているのでした。私は仕方なく、一人でニューヨークの街の中へ行き、サンドウィッチスタンドへ出かけました。昼食時なので、店の外まではみ出して列に並んで待っていました。Next, Next という言葉でだんだん私の順番が近づいてきました。私の順番の前までに、ボードに書いてあるサンドウィッチの看板を見ながら、心に決めていた「トゥナ サンド」を頼みました。

『トゥナ サンド プリーズ』すると、カウンターの中の方は、言いました。『オン ワー』

私は何のことかわからず、ポツとしていました。後ろには長い列が続いています。しかし、もう一度、『オン ワット』

やはり何のことかわかりません。誰一人私に声をかけません。カウンターの中の男はイライラして、パンを指さしました。そこにはいろいろなパンが並んでいました。スライス